

主題表現法に基づく鑑賞及び評価能力育成に関する考察

——題材「BFOが舞い降りて～水彩技法を用いて～」の鑑賞を通して——

*立原慶一・**斎藤守彦・***小野あけみ

Observations on art appreciation and the cultivation of evaluative capabilities based on the thematic expression method

——Through appreciation of the theme "BFOs come fluttering down : using watercolor techniques"——

TACHIHARA Yoshikazu, SAITHO Morihiko, ONO Akemi

Abstract

If one were to undertake theoretical reflection on the content and process of art production, and an artistic ideal as a better approach to improving future work were to be presented along with one's own thematic expression, would this not enhance one's art appreciation and evaluative capabilities with regard to artworks in general? This is the question that this study takes as its departure point.

As the research method, first of all patterns are identified in the act of older elementary school children appreciating their own work, and questions devised and set that will act as perspectives to encourage artistic insight by scrutiny from a science of art perspective. Secondly, the methodological hypothesis that the experience of appreciating one's own work via a carefully considered questionnaire is effective in cultivating the ability in question is verified by repeated implementation among subjects including education students, and working teachers.

Thirdly, in order to feed results back into this methodological hypothesis and further boost its validity, the questions are partially revised and a number of new questions added. This revised version is then tried out on junior high school pupils. Fourthly, a plan is formulated to develop this to a greater level of maturity as a practical methodology with an education program in mind designed to cultivate the strengths of children/pupils in the domain in question.

By putting the theme into practice and observing the results, it was confirmed that the art appreciation and evaluative capabilities of those engaged in art production could be enhanced by the methodology proposed in this study. The following state of affairs was revealed as the third stage outcome of the study:

In order to make the question concerning "Ideas for expressive effects that bring the physical and material sensations accompanying the act of painting" in "Ways to utilize art/design language" easier for junior high school pupils to understand, the following change for example is recommended: "Ideas for expressive effects wrought by brushwork and brushmarks, and by implements other than the brush."

* 美術教育講座
** 宮城県美術館
*** 宮城教育大学附属中学校

Secondly, a pressing need to add questions ascertaining the stylistic cohesiveness among different methods of expression also became apparent. By next trying a revised version with these additions and alterations, we are confident that the chances of subjects being able to intuitively grasp the "overall theme" itself and verbalize its roots in terms of methods of expression will improve.

Key words : 理論的な反省 (theoretical reflection)
 方法論的仮説 (methodological hypothesis)
 教育プログラムを含んだ実践的方法論
 (practical methodology with an education program)
 自作品の鑑賞体験
 (experience of appreciating one's own work)
 表現効果の工夫 (idea for expressive effects)
 全体的主題 (overall theme)

はじめに

制作内容・過程をめぐって理論的な反省がなされ、今後における作品のより良き改善策としての美術的理想が、自らの主題表現に伴って提示されるならば、作品一般に対する鑑賞及び評価能力を、高められるのではないだろうか。本研究はこのように、表現と鑑賞の相互スパイラル運動的效果を課題とする。

主題表現の性格としては、たとえば「悔しかったこと」などの生活感情的題材、さらには「包帯を巻いてあげたいもの」や、世界の意味づけとしての各種物語などの世界観的題材に動機づけられること、しかも「自分たちの作品」が本格的な鑑賞教育の対象とされること、その二つが条件とされる。その種の作品は視覚に訴えかけるだけでなく、人間性探究の成果としてあった美術作品や、文化財に伍するなど鑑賞行為の普遍性に通じる局面を持ち合わせていると思われる。

「自分たちの作品」が研究対象として選ばれるのは、次の根拠にもよる。現行の小学校図画工作科学学習指導要領は独立した鑑賞を推進する一方で、依然、小学校全学年をはじめ中学校でも自分たちの作品を、第一義的な鑑賞対象として規定しているからである。しかし従来、児童・生徒が授業過程の最終段階(まとめ)以外に、「自分たちの作品」をじっと見つめることはなかった。「面白い点」や「よいところ」、「美しさ」はどこかなど、決して豊かな鑑賞体験へ発展することのない安直な問いかけに終始し、その場面は短時間で終了したのである。すなわち時間をかけてじっくりと

見るのに不可欠な見方や観点も、彼らに対して発達段階及び習熟度別に提示されることは、なかったように思われる。

研究方法としては第一に、高学年児童が行った自作品鑑賞行為の分析結果を、基軸に据えることにする。彼らの実態における特徴を類型化し、それを踏まえるとともに芸術学的に吟味することで⁽¹⁾、美術的洞察を促進させる観点となるような、質問項目の数々が考案・設定される。第二に、上記手法によって作成された、質問紙による自作品の鑑賞体験が当該能力の育成にとって効果的である、との方法論的仮説が教育学部学生や現職教員を対象に実践することで検証されよう。

第三に、この方法論的仮説にフィードバックしてその有効性をさらに高めるべく、各質問項目を部分的に修正しその一部が追加される。これら改訂版を今度は中学生に対して実践してみる。第四としてはそれが児童・生徒の当該領域における力量を育成するための、教育プログラムを脱んだ実践的方法論として成熟することを目論む。そのために各種題材配列案が考案され、各地の小・中学校で実践される。ここで実践的方法論とはある教育目的を実現するために構造化(カリキュラム化)された、制作法と鑑賞法からなる理論的枠組みの謂いである。

これが研究全体の趣旨である。ただし本稿は中学生に対して実践し、その内容を対象とするため第三ステージの研究として位置づけられる。とりわけ鑑賞及び評価能力に関して、あくまでも彼らによる全回答内容をにらみながら、評定基準を分節化して複数設定す

る。さらに回答内容を改めてその枠組みに位置づけてみる。それによって彼らにおける能力の現状と、次なる教育課題を明確にしてみたいと思う。

今回、方法論的仮説が、宮城教育大学附属中学校第2学年4クラス152名に対して実践されることで、その有効性が調べられよう。

アメリカのM.J.パーソンズ理論を前提とした石崎和宏氏の研究成果によれば、小学校低・中学年児童にあっては画面に再現されたモチーフや情景を確かめることが中心となって、鑑賞行為が行われる傾向にある。それに対して高学年児童の鑑賞では形や線、色など造形要素のありようを確かめることが主体となって、鑑賞行為がなされるという⁽²⁾。とすれば心理的精神的にさらに発達しているはずの中学生は、指導することによってモチーフ・情景の選定及びその性格づけばかりでなく、造形要素の効果的な活用法としての描写・彩色法、構図法、空間構成法、描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす造形言語の活用法など、表現形式面に関して注意を払えることになるだろう。

「BFOが舞い降りて～水彩技法を用いて～」の題材制作後に、自己の表現方法のあり方を効果的な主題表現、という関係的な観点から理論的に反省させる。また作品がより良くなるための条件を提案するような、質問項目に対して答えさせる。造形的感覚的特徴を伴って、主題が感じ取れると判断された作品を2点選ばせ、その根拠を表現方法に求めさせる。そうした課題が課されそれに対する回答を求め、さらには各自の作品評価基準を明示させる。本研究ではそれらのデータが独自の研究方法によって分析、検討されることになる。それは「鑑賞及び評価行為における評定内容の複数基準化法」と「表現方法の鑑賞及び評価行為で自覚される造形言語活用実態の計測法」である。

1. 質問項目の改訂について

本研究の第二段階で、教育学部学生や現職教員に対して課せられた質問項目は次の通りであった。

- ① あなたの絵の主題は何か。
- ② 絵の主題を表すために、モチーフ・情景の選定と性格づけをいかに工夫したか。
- ③ 絵の主題を表すために、描写・彩色法、構図法（ここで構図法とは二次元平面における操作で、モチー

フの画面への配置法を指す）、空間構成法（これは奥行き・三次元空間における操作で、一つの視点から画像・映像を組み立てる場合は、対象との距離や角度をいかにするか、複数の画像・映像からなる場合は各画像・映像を主役や脇役の関係、これに付随する上下の関係や大小の関係《各種映像のサイズ、対象との距離》に配慮して、いかに調和的に重ね合わせるかの仕方の謂い）、描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす、造形言語の活用法をいかに工夫したか。

- ④ あなたの作品から主題形成（主題表現に成功し作品から感じ取られるべきもの）は感じ取れるか。もし弱いとすれば今後、どこをいかにすればよいのか。

ただし回答する際には、下線を施してある専門用語を使うことが条件とされた。

これら質問項目を本題材「BFOが舞い降りて～水彩技法を用いて～」に適合させるとともに、中学2年生の鑑賞及び評価能力を配慮して、それは以下のように改訂された。

- ① あなたのBFO物語全体の主題（テーマ）は何ですか。
- ② あなたの絵の主題（テーマ）は何ですか。
- ③ 絵の主題を表すために、モチーフ・情景えらびと、ポーズの付け方をどのように工夫しましたか。
- ④ 絵の主題を表すために、下のことについてどのような工夫をしましたか。下線のあるキーワードを用いて記述しなさい。

A	<u>描写・彩色法</u>	形や色の工夫 彩色の仕方の工夫。
B	<u>構図法</u>	構図、画面への配置の工夫。
C	<u>空間構成法</u>	ものの奥行き表現の工夫 対象との距離(遠近)の工夫 みる角度の工夫 ダブルイメージで、主従や上下の関係を考えた ダブルイメージで、調和を考えてモチーフを重ねた
D	<u>造形言語の活用法</u>	描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす表現効果の工夫

- ⑤ あなたの作品から、主題形成（主題表現に成功し、作品から感じ取られるべきテーマ、表現したいあの場面のあの感じ）は感じ取れますか。もし弱いとすれば今後、どこをどのようにすればよいのか書きなさい。
- ⑥ 2年生B F Oの作品の中で、テーマ（あのときのあの感じ）が、画面から感じ取れる作品があれば、2点選びなさい。選んだ理由も書きなさい。

2. 鑑賞授業の実践

題材「B F Oが舞い降りて」の作品鑑賞では、改訂版各質問項目に対して回答させるに際しては、教育学部学生や現職教員に対して行ったように下線の付いた専門用語を必ず使うことが条件とされる。鑑賞及び評価体験についての記述に、これら鑑賞スキルを裏付ける専門用語が用いられることで、広く美術作品や文化財の美術的特質を感受し解釈するために必要な、概念と論理を着実に身につけさせることができる。ここで解釈とはパーソンズに従い、作品の諸要素から作者の意図や心情としての作品の意味を説明すること、の謂いである⁽³⁾。そうした波及効果が認められると思われる。

とくに物語や文学作品など生活感情及び世界観的題材の制作に伴う、鑑賞及び評価行為は、主題意識や表現意識が制作者相互にとって明瞭で多くの部分で互いに重なり合う分、彼らをその種の主題表現にふさわしい表現方法の多様な構想内容、並びに手を働かせた事柄について論評させる。且つまた表現性の質を主体的に価値判断させる。ここで表現性とはパーソンズに倣い「作品の意味や心情性などの美的内容」⁽⁴⁾の謂いで使う。したがってそれは本稿における「主題形成」と同義である。

本題材名にある「B F O」とは「空中を美しく舞い降りる立体作品」であり、Beautiful Flying Objectを略した呼び名である。第一に、紙やビニール、薄い発砲スチロールなどを材料として制作し、高所から空中に放って飛行させる。第二に、自分がB F Oを操縦し、架空の場所に舞い降りたものと仮定して空想を広げ、そこに起きる出来事を物語として創作する。第三に、物語の一場面を想像画として表していく、という過程を辿る。これは美術科時間数削減に対応するべく、

前・宮城教育大学附属中学校教諭（現・宮城県美術館教育普及部主任主査）斎藤守彦氏によって、立体デザインと物語の絵からなる複合題材として新たに考案・設定された⁽⁵⁾。

さて、これまでの議論では鑑賞と評価の語がほぼ同じような意味で用いられてきたが、ここで別々に定義されることになる。鑑賞力とは作品に織り込まれた美術的特質の意味を感受しうる能力、いわば作品を「見て感じる」力と考えられる。それは日本の図画工作科及び美術科学習指導要領で「感性」と定義され、とくに中学校美術科では教科目標の一つとして掲げられている。また評価力とはそれを前提としつつも客観的な立場に立ち、作品の意味や心情性が一体いかなる表現方法を根拠に直観として画面に実現されているのかを論述し（パーソンズの「解釈」に相当）、どの程度効果的にそこに与えられているか、さらには各作品を相互に比較した上で感受の度合いを価値判断する、理性的な能力の謂いともなる。

とにかく生活感情及び世界観的題材の鑑賞実践では、主題形成が作品から直観として感受されるか否かが判断され、それを実現させるべき表現内容や表現形式のあり方などが反省的に論じられ、表現効果が序列化される。その経験によって鑑賞及び評価能力が効率良く育成される、という教育成果が認められるに違いない。評価される表現方法の中身としては、モチーフ・情景の選定法及び性格づけなどの表現内容以外に、描写・彩色法、構図法、空間構成法、描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす、造形言語の活用法などの表現形式があげられる。

本稿では、②～⑥の質問項目に対する回答内容を参考にしながらも、とくに質問③～⑥に対するものが重点的に分析された。それは描き終わった時点で自分たちの作品を評価し、それを踏まえて作品がさらに良くなるための可能性を、表現内容及び表現形式のあり方の理想として述べさせたものである。

3. 各種表現方法の「鑑賞及び評価行為における評定内容の複数基準化法」による考察

作品を見て、その美術的特質を感じるに際しては感じ方に強弱の差はあるにせよ、主題形成を自分の作品から感受できないと述べた者は皆無であった。した

がってほぼ全員が、満足感を抱いていたことが分かる。

- ⑤ あなたの作品から、主題形成（主題表現に成功し、作品から感じ取られるべきテーマ、表現したいあの場面のあの感じ）は感じ取れますか。もし弱いとすれば今後、どこをどのようにすればよいのか書きなさい。

この質問に答える形で、自分の絵から強烈な主題形成を感じ取れるための表現方法として提起されたのは、描写・彩色法でメリハリを付けて迫力を出したい、迫真性や臨場感を持たせたいという創意内容であった。それは約8割の生徒によって自覚された。モチーフ・情景の選定法や構図法、空間構成法、身体感覚のもたらす造形言語の活用で改良案を出している生徒は、それらすべてを合わせても全体の約2割に過ぎなかった。また無記載の者が数名存在した。それにしてもより良き主題表現のために描写・彩色法に習熟し、心を込めて丁寧に描き込むことは彼らの脳裏から離れることのない関心事なのである。

「(1)モチーフ・情景選定法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」「(2)描写・彩色法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」「(3)構図法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」「(4)空間構成法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」「(5)描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす、造形言語活用法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」の各項目について、とくに評定のための基準をすべての回答内容に着目しながら分節化して、複数設定する。次いでそれらを改めて、それぞれにランクづけることにする。

「(1)モチーフ・情景選定法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」では「レベル1」の者は14名で、その内容としては選定法に関する記載がないか、もしくは(2)や(3)にほぼ該当する内容が述べられているなど、回答すべき表現方法の範疇が誤っている。「レベル2」の者は99名で、その実態としては自作品を見てモチーフ・情景の選定法が主題表現に及ぼす効果性を、反省的に確かめている。「レベル3」の者は39名で、そこでは他と比べて独自の工夫内容が自覚されている、と判定されることをメルクマールとした。典型的事例として「UFOの方が速度が速いので摩擦の火を自分のBFOより強めにした。ただ空だけでなく雲なども入れてみた。UFOを発見した感じを指で指す動作で示した」をあげたい。

「(2)描写・彩色法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」では「レベル1」の者は10名で、その中身としては描写・彩色法に関する記載がないか、あたかも他の質問項目に対して答えているかのように捉えられるなど範疇が誤っている。「レベル2」の者は139名で、その実態としては主題表現のために自分が行った描写・彩色法を反省的に、記述しているところに指標がある。「レベル3」の者は3名で、描写・彩色法をめぐって全体と部分の関係など、そのまとまり感のもたらす様式的効果が、自覚されているところにメルクマールがある。事例として「私はバラの色を工夫してみました。一色だとふつうすぎるので、一つのバラでも三つのパターンの色を作りました。となり同士の色の関係、全体としての色のバランスなどに注意して色を選ぶには少々時間がかかりましたが、自分なりの作品が作れたと思います」があげられる。

「(3)構図法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」では「レベル1」の者は82名で、その内容としては構図法に関する記載がないか、空間構成法と混同しているなど表現方法の範疇がズレている。「レベル2」の者は64名で、その中身としては主題表現のために自分が行った構図法の効果を、反省的に確認している点にメルクマールがある。「レベル3」は6名で、ここではモチーフ・情景の配置における中心と周辺への配慮や左右のバランス、拡がり感を出すための対角線構図の採用など、構図法の仕方をめぐって二種類以上の創意・工夫が語られている。事例として「真ん中に道路を置いて、BFOである自動車を何台か描くことができました。ビルを多く配置し密集している感じが表現できました」をあげたい。

「(4)空間構成法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」では「レベル1」の者は45名で、実態としては記載がないか、もしくは構図法と混同して記述している点に特徴がある。「レベル2」の者は102名で、中身としては主題表現のために自分が行った空間構成法の働きを、反省的に分析しているところにメルクマールがある。「レベル3」は5名で、ダブルイメージ法をはじめ、対象との距離（大小関係）や対象との角度など、空間構成法の仕方をめぐって二種類以上の工夫が述べられている。事例として「奥行きが出るように木の大きさをしっかり大小をつけて描くことができました。またやや上から見下ろしているような角度で描く

こともできたと思います」「上から見た角度と横から見た角度を組み合わせて描いた。ダブルイメージで明るい世界と暗い世界を分けて考え、中にBFOを入れることで明暗をさらに明確に分けて描いた」等があげられる。

「⑤描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす、造形言語活用法の鑑賞及び評価における評定内容の基準化」では「レベル1」の者は122名で、内容としてはそれについて一切記載がないか、表現方法の範疇が異なっている点を特徴とする。「レベル2」は30名で、中身としては主題表現のために自分が行った、造形言語の活用法の働きを反省的に確かめている。この第5項目のみ評定基準が他と異なり二段階のみとなっているが、回答内容をくまなく吟味してもそれ以上に分節化するメルクマールが見あたらなかったからである。レベル2の事例としては「歯ブラシを使ってキラキラ感を出した」「風を表現するために横や縦にぬるのではなく、いろいろな方向に描いてみた」をあげたい。

以上の調査結果全体を見渡して、その特徴となる点をいくつかあげてみたい。第一に、より良き主題表現のために創意・工夫するべく、描写・彩色法の効果を理論的に反省している者が152中名の142名にも達し、改めてその範疇に対する関心の高さが窺われる。第二に、いずれも表現形式ではあるが生徒にとって空間構成法よりも、構図法の操作のほうが難しかったのが意外であった。空間構成法の表現効果を反省している者が107名であったのに対して、構図法に関しては70名にすぎず全体の半数にも満たなかった。それは複合的題材の持つ性格に原因があるように思われる。すなわち本題材の制作では作品を実際に飛翔させる際にも、絵画表現する場合にも空間そのものを過度に意識させたからであろう。第三に、描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす、造形言語の活用法は中学生にとってさすがに難しかったらしく、全体の約2割の生徒しかその種の表現効果を認識できなかった。

「鑑賞及び評価行為における評定内容の基準化法」による考察で、造形表現力の各局面における現状と課題が明らかとなった。ちなみに②～④の質問項目は基本的には、表現意図とそれを効果的に実現するための表現方法のあり方を、関係論的に吟味するようにし向けられていた。一連の質問項目はすべてこれらテンプレートによって貫かれていた。そのため質問に答える

ごとに、効果性に裏付けられた表現意図と表現方法の関連構造が徐々にではあるが、自覚されていったのである。各質問項目に対する回答で、「レベル2」以上の成績を示した生徒の内訳は以下の通りである。(1)では138名で91%、(2)では142名で93%、(3)では70名で46%、(4)では107名で70%、(5)では30名で20%であった。この調査結果から構図法と、身体感覚や材質感のもたらす造形言語の活用法に課題の残ることが判明した。

4. 鑑賞及び評価の実践

(1) 実践内容の分析

生徒作品の選定では、2年生の全作品を鑑賞して、次の問いに答えさせた。

⑥ 2年生BFOの作品の中で、テーマ（あのときのあの感じ）が、画面から感じ取れる作品があれば2点選びなさい。選んだ理由も書きなさい。

152名の中学2年生によって、主題が画面から感じ取れると見なされた作品は一人当たり2点を選ぶことになるから、額面上は合計304件が選び出されるはずである。しかし無記載の件数が12件に及んだから、実際は292件に留まった。彼らが選抜した作品74点（1票以上）の主題表現性を検討したところ、そのうち条件から外れたものは皆無であった。

1位の作品は292票の内32票、2位は28票を獲得した。3位は16票で3作品、6位は14票、7位は11票、8位は8票で2作品、10位は7票であった。上の調査結果で特徴的なのは、3位（16票）から1票獲得の48位（27作品）までは票数が2、3票の割で漸減するなどなだらかな変化を示したが、2位と3位の間で12ポイントもの差がついた点である。1位並びに2位の作品が3位のそれを大きく引き離している。それらは格段に優れていると判断されたのであろう。ちなみに描写・彩色法でメリハリを付けて、迫真性や臨場感を作品にもたらしたいという創意・工夫は約8割の生徒によって提起されたが、2位の作品はそうした意向を如実に反映しているため高く評価されたのであろう。

それらでは確かに「全体的主題」（後述する）が、多様な表現方法の裏付けを受けて画面から感じ取れるとともに、そのインパクトも相当に強いのが特徴となっている。彼らが一連の質問に答えていった中で、

専門用語を活用することによって鑑賞と解釈のための概念が順次身につく、それらが裏付け的に働いた。結果的に、表現の効果性や主題の感受度を序列化する評価力が、高められたからと思われる。

第3質問から第6質問に答える過程で、全項目を貫くテンプレートの働きによって鑑賞及び評価能力が徐々に高まっていったことが、回答内容の充実度から窺われる。この第6項目の質問は第1項目の質問から数えて6番目に位置し、時間配列的に最後のものとなった。それだけのこともあって、主題形成とその表現方法的な根拠の効果的な関係をめぐって理論的に自覚するレベルは全体的に見て、それまでの質問に答えた内容よりも数段にアップしているのである。

すなわち作品を解釈（作品の諸要素から作者の意図や心情など作品の意味を説明すること）するに際して、概念の数が増えるとともに、論理性に注意が払われるようになった。このように両者の関連について洞察力は発揮されたのであるが、主題感受のレベルに関しては以下に述べるように三段階に分けることができた。

本稿で提起される方法論的仮説は、一定の手続き（研究方法第一段階）を踏んで作成された、質問紙による自作品の鑑賞体験が当該能力の育成にとって効果的である、との命題からなる。それは作品を見てその表現性（「主題形成」と同義）を感受するとともに、その根拠を表現方法に求め論述する能力に他ならない。とにかくその有効性が実践的に確かめられたといえよう。

彼らによって作品評価の基準として掲げられたのは、作者の意図や心情などが画面から感じ取れるか否か、という視点も一定数（36件）認められた。その見方・感じ方はパーソンズやA.ハウゼンらの鑑賞理論ないし絵画理解理論に関する先行研究を繙いてみても、鑑賞活動における普遍妥当なもの判断されよう。したがってそれは本方法論の成果を確かに示している箇所である。しかし数の多さからいえば、まぎれもなく「きちんと再現描写がなされ、リアル感が出ているか否か」（130件）である。

実例として「大きな雲や小さな雲。たくさんの花にも大きいもの、小さいものがある、遠近感がきちんと出ていた。道も太いところから細いところになって、そのさきにはあざやかな青色をつかった海がと

てもきれいで、その海の青でもうすいところ、こいところがあってとてもきれいに描けているから」「雲の様子が本物みたいだった。花の遠近で距離感がつかめた。また、浮かんでいる雲の大きさや形の特徴がすばらしいと思った」等である。彼らにとって本物と見まがうばかりの迫真性が、作品評価における第一の観点を作り上げているのだ。

(2) 中学生における主題感受の諸相

今回の実践対象である中学2年生の中で、作品の「(1)全体的主題」を感受しえたと思われた件数は、292件中の36件であった。同一生徒であっても彼らによって選抜された二点中のいずれにも、全体的主題を見出したわけではない。人数的には23名であった。その点で彼らの感受体験には、常にレベル的には不安定さがつきまとっていることが分かる。全体的主題とは作品全体の意味や心情性などの美的内容を指す。それはパーソンズに則って、全体的な表現性と言い換えられてもよい。彼らにあって表現性とは作品の意味や心情性の意味で使われている。したがって全体的主題の感受は彼の理論における、「表現性の解釈」の一部を形づくっている。それは作品の全体的な美的内容を直観的に把握し、表現方法的な根拠を突き止め言葉で説明することである、と定義される⁽⁶⁾。

「(2)部分的主題」を捉えた件数は126件であった。部分的主題は作品全体の質的な形態システムからではなく、登場人物の表情や挙措、さらには描写・彩色法や構図法、空間構成法など一部の表現形式からつかみ取られる。部分的主題の直観的な把握はパーソンズにおける、「表現性の分析」の一部を形成している。それは作品の部分的な美的内容を把握し、表現方法的な根拠を突き止め言葉で説明することである、と定義される⁽⁷⁾。「(2)部分的主題」の把握は鑑賞及び評価能力のレベル的に見て、「(1)全体的主題」のそれに劣るのである。

「(3)再現的主题」の感受に留まった件数は130件であった。それはリアル感並びに立体感や遠近感、質感がそのまま絵の主題として捉えられた場合である。今回の実践では、この例が数量的には「(2)部分的主題」に限りなく拮抗するものの、一番多かったのは確かである。

なお「無記載」の件数は先にも述べたように12件で

あった。

(3) 鑑賞及び評価の具体的事例と主題感受習熟度の考察

「(1)全体的主題」を感受した事例（表現性の解釈、36件）

「物語にとっても合っている絵だと思った。戦っている臨場感が感じられた」「ストーリーのものすごく切ない感じが表れていた。城が自分の好きなカリオストロの城と、ベルギーの建物が合わさった感じが好き。色の出し方がすばらしい。愛と勇気と友情がつまっていた」「怪しい雰囲気があった」「道のわきについている飽みたいな木がものすごく新しい感覚でグツときた。あざやかな色合いもきれいで、心がいやされる気分になりました」。

「(2)部分的主題」を感受した事例（表現性の分析、126件）

「しょうとつした感じや、宇宙の感じがきれいに表せていると思います。空間構成法、構図法がよくできていると思う」「宇宙の感じが色づかいですごく伝わってきた。少シグロテスクなところもいいと思います」「淡い感じの色の中に一つだけでなく、何色かの色がきれいに入っていて、『宇宙』という世界をすてきな場所に感じさせてくれる絵です。また、虹が雲の間に描かれていることで、可愛いなと思いました」。

「(3)再現的主題」を感受した事例（130件）

「きれいな描き方ですごいなと思ったから。それに空の感じもうまくできていたので、これを選びました。遠近法の使い方もうまかったから」「一つ一つていねいに描かれていてきれい。私の今後の課題である、同じ物に色の『こい、うすい』をつけるという点ができていた。川の青さに白が入っていて、輝きがでていたし、奥の木には、いろんな緑が使われていて奥ゆきがみえた」。

ここで方法的仮説にフィードバックして、質問項目に次の改訂が加えられるならば、全体的主題を直観的に把握させるべく教育効果はさらに高まるに違いない。すなわち、主題意識（表現意図）とそれを実現するのに効果的なモチーフ・情景の選定法、構図法、空間構成法、身体感覚のもたらす造形言語の活用法な

ど、多様な表現方法相互をめぐるまとまり感を見極め、その価値が総合的に判断されるような質問項目を中学生にも理解できるような文言で組み立て、新たに考案・設定するのである。

(4) 主題感受習熟度の考察

今度は翻って「(1)全体的主題」を感受しえた者が行った、「質問事項④のD 造形言語の活用法（描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす表現効果の工夫）」に対する回答内容に着目してみよう。というのもその問いかけに対して回答できた者が、このグループではおおよそ感覚的に判断しても、他の2グループに比べて俄然数多く認められたからである。

その興味深い現実を把握するべく詳しく調査・検討した結果、全体的主題を把握した者23名中、造形言語の活用法を正当に言及していた生徒は実に18名に及んだ。

部分的主題を把握した60名中、造形言語の活用法を正当に語れていた生徒は7名であった。また再現的主題を把握した者64名中、造形言語の活用法を誤りなく述べた生徒は5名であった。いずれのグループでも両者の相関関係は極めて弱いことが判明する。

以上の調査結果を振り返ってみて、主題感受の習熟度レベルは「質問項目④のD 造形言語の活用法」に対して、どのくらいの確に回答できたのかに関わり、それによって測られるのではなかろうか。いわば習熟度はそれに対する言及行為と深い相関関係にあると見なしてよからう。ここで描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす造形言語の活用法を認識することは、表現方法の中でもとくに難解であった事態が想起される。それは全体的な主題を感受できるほど高度な鑑賞及び評価能力を構成し、それと密接に関与し合っているのであろう。

ちなみに作品鑑賞の理想的なあり方は、その全体的な主題を感受し言葉で語れるとともに、その表現方法的な根拠を突き止め同様に言語化できることにある。すなわち表現性（主題形成）の感受と、その造形的感覚的な成立条件を解釈することに求められる。その要因としてはモチーフ・情景の選定法、描写・彩色法、空間構成法、造形言語の活用法がもたらす効果性を主題表現との関係で分析し、その緊密度を総合的に把握できるようになることである。

まとめ

これまで題材実践を行いその結果を考察してきたが、表現と鑑賞の相互スパイラル運動的效果をにらんだ方法論によって、制作者の鑑賞及び評価能力を高めうることが確かめられた。その際、「鑑賞及び評価における評定内容の複数基準化法」による考察は、当該能力のレベルと特徴を見極める有効な方法となった。各個人におけるレベルアップの課題を確認する上で、客観的な手がかりを与えるのである。研究の第三ステージに位置づけられる実践の後に踏むべき、研究行為として方法論的仮説にフィードバックしたが、次の事態が判明した。

各質問項目では文章のテンプレートが、主題意識とその効果的な造形表現化の密接な関係を見極めるとともに、画面に直観として現れた主題形成を適切に序列化させるなど、中学2年生の鑑賞及び評価能力の育成にとって有効に働いた。小論で主題感受の習熟度をめぐっては、「表現方法の鑑賞及び評価行為で自覚される造形言語活用実態の計測法」による考察を行ってきたが、前者の程度と後者に対する正答率の関係に有意性が認められた。そうした研究成果から、質問項目の文言に以下のような部分的修正が試みられるならば、「全体的主題」をつかむための突破口ともなりえよう。すなわち生徒による主題の直観的把握に成功する件数が増えるなど、さらに方法論的仮説の実効性を高めることが期待されると思われる。

それは「質問項目④のD 造形言語の活用法」中の「描く行為に伴う身体感覚や材質感のもたらす表現効果の工夫」を中学生にとって身近でより分かりやすい文言とするため、たとえば次のように一部を変更することである。「筆さばきや筆のあしあと、さらには筆以外の用具がもたらす表現効果の工夫」。

また方法論的仮説にフィードバックした結果、第二の対応として表現方法相互間の様式的なまとまり感を見極められるような、質問項目を追加する必要にも迫られた。これら二課題が盛り込まれた改訂版を作り上げることによって、「全体的主題」そのものを直観的に把握し、その表現方法的な根拠を突き止めて言語化できる比率が高くなるに違いない。

註

- 1) 立原慶一「主題表現に伴う作品の自己評価に関する考察」『大学美術教育学会誌第39号』 2007年 92-193頁
- 2) 石崎和宏・王文純『美術鑑賞学習における発達とレパートリーに関する研究』 風 間書房 2006年 97頁。同様な見解は監修山本正男、編集井上正作『感性の論理とその実践—I 美術教育の思想・方法・実践』 大学教育出版 2004（平成16）年 166頁にもある。
- 3) 同書 164頁
- 4) 同書 106頁
- 5) 立原慶一・斎藤守彦「美術教育における統合化の構造とその問題点—題材『美しく 舞い降りる立体作品』を事例として—」『宮城教育大学紀要第37巻』 2002年 89-103頁
- 6) 石崎氏前掲書 231頁
- 7) 石崎氏前掲書 230頁

（平成20年9月29日受理）



32票



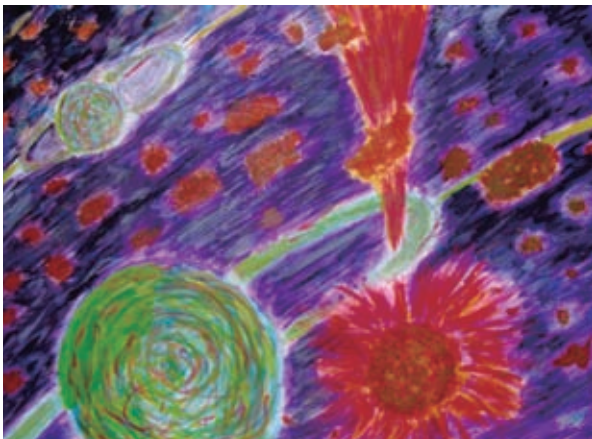
28票



16票



16票



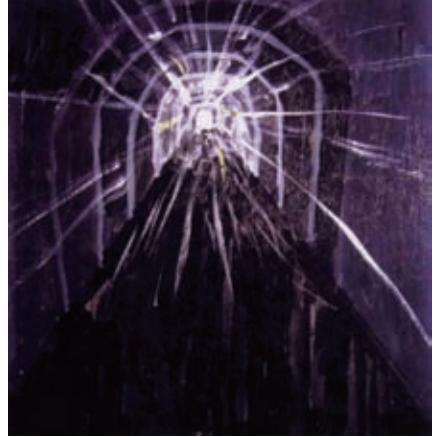
14票



11票



8票



8票



7票



7票



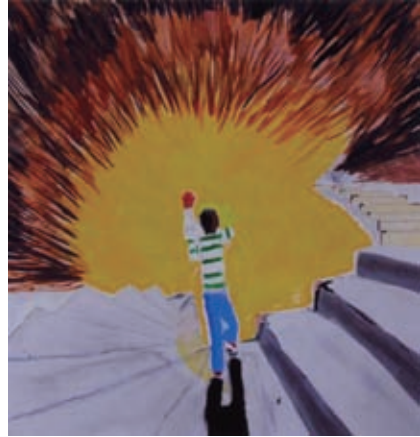
6票



6票



5票



4票



4票



3票